

# I 論文

## マルチメディア教材の学習効果に関する研究 —— 読解過程における朗読音声の提示について ——

鈴木庸子

### 要 旨

上級以上の日本語学習者を対象に、電子辞書、朗読音声提示機能を添えた読解学習支援システム（CD-ROM 版の電子ブック）を開発した。辞書は英語と中国語の訳、漢字語彙の読み方、例文、関連語彙を含む。朗読音声は、ややゆっくりした速度で専門家によって読まれたものを電子化し、読解の過程で自由に聴くことができる。ほかに、学習時間、検索した単語、音声提示機能の利用状況をフロッピーディスクに自動的に書き込むことができる（学習履歴）。学習ストラテジーや文型、単語を印刷教材で学習できるようマニュアルを準備し、また読解中に検索した単語は、のちにハードコピーとして印刷できるよう自動的に保存される。本研究では、この教材を利用して朗読音声を聞きながら読解を行うことで、聴解能力が向上するかどうかを明らかにするため、学習実験を行った。その結果、ディクテーションの結果が向上することが示された。また、学習履歴を分析したところ、学生は継続的な読書ではなく事後テスト直前にまとめて読むケースの多いことがわかった。継続的な読書のためには、自律性のみには任せるのではなく、外からの支援を工夫する必要があると考えられる。

キーワード：マルチメディア教材、読解、聴解、朗読音声、読解学習支援システム

### 1. 研究の背景

田地ほか（1987）による「日本語教育（上級レベル）のための CAI システムの開発」の研究は、「食糧問題を考える」という文章をコンピュータの画面上に提示し、オンラインの単語解説と、文章の朗読音声テープを装備したマルチメディア教材を開発し、その上で学習効果の形成的評価を行った研究である。

このマルチメディア教材はもともと、次のような設計に基づいて開発された。まず、学習対象者は上級以上の日本語学習者である。この学習者は大学での正規の日本語教育期間を終了し、専門の学業を始めている。すなわち課題図書を読み、講義を聴き、討論に参加し、口頭発表を行い、レポートや論文を書く、という活動を日本語で行う。しかし、必ずしも日本語の講義を受けるに足る十分な日本語力を保持しているとはいえない。たとえば、日本語能力検定試験の最上級レベルである 1 級の語彙レベルは 1 万語である。これは成人の日本語母語話者の語彙レベルが 4 万語以上といわれていることを考えると極端に少ないといえよう。このギャップは学習者が個人的な努力によって、独習で埋めていくことにな

る。その独習を支援することが「食糧問題を考える」の主眼であった。

教材の内容は、大学の一般教養の教科書として用いられるものである。コンピュータを利用した電子ブック型の教材とすることにより、読解活動を行いながら、「文脈を伴った単語学習ができる」「オンライン辞書によって、読む速度を落とさずに多読ができる」という利点を持っている。その結果、学習者の語彙力、読解力が自然に増すことを想定している。また、課題図書を読んだのちに講義に参加する、という場面を考慮し、読解本文の朗読音声の提示機能が装備してある。本文の読解過程で朗読音声を聞くことが、聴解力をつけるために役立つであろうと想定したからである。

この開発研究の結果、朗読音声の提示が読解にあたって読み速度のペースメーカーになり、学習者が音声なしで読む場合に比べ速く読めることが示された。しかし、朗読音声を聞きながら読むことと、聴解力向上との関係は示すことができなかった。

そこで、「食糧問題を考える」の研究を継続して読書支援システム『新書ライブラリー』を開発した。読解素材は、汎用性を持たせるために、専門書ではなく「講談社現代新書」から留学生にとって興味深いと思われる内容の書物を複数選んだ。

その学習効果を明らかにするため数次にわたって『新書ライブラリー』の試行を行い、この読書活動が日本語力の向上にどのような効果を持つか、明らかにしようとしてきた。その結果、読解力の向上については証明することができなかったが、学習者の単語力と読む速さは向上することが示された(来嶋・鈴木2000)。朗読音声の提示については、学習者がこの機能をどのように利用するかを調査した。その結果、学習者は「漢字語彙の読み方を知る、アクセントやイントネーションを知る、文の区切りを知る、発音練習のモデルとする」などの目的を意識して、「黙読しながら聞く、単語を引きながら黙読しその後聞く、聞いた後で黙読する、聞きながら声を出して読む」などの方略を用いていることがわかった(Suzuki et al. 2002)。

## 2. 研究の目的

本研究は、『新書ライブラリー』の学習効果を明らかにする研究の一環として、上記の研究に引き続いて行われたものである。研究の目的は次の2点である。

- 1) 開発教材『新書ライブラリー』を用いて、朗読音声を聞きながら読むことと学習者の「聞き取り能力」の向上の関係を検証すること。
- 2) 学習者の学習過程を分析し、独習を可能にする学習環境について示唆を得ること。

第一の目的の「朗読音声を聞きながら読む」とは、教材開発の側からは「朗読音声の提示」であり、本文の文章を専門家が朗読したものを、文章を目で追って読んでいる過程で同時に聞かせることである。文章の意味の理解は文字情報と音声情報の両者を通して行われることになる。このような課題を行う過程で、音声提示は、学習者の「聞き取り能力」

を向上させるであろうか。

第二の目的の「学習過程の分析」は、『新書ライブラリー』が学習履歴を記録できる機能を備えており、その学習履歴をもとに学習過程を調査し、学習者が与えられた期間中にどのように実際の学習を行っているか、すなわち、「独習」が具体的にどのように行われているかを明らかにする。その上で、教材開発の意図である「独習による自律的な読書」の環境について考察する。

### 3. ウィンドウズ版『新書ライブラリー』の構成

ウィンドウズ版『新書ライブラリー』はマッキントッシュ版『新書ライブラリー』（来嶋・鈴木2000）をいくつかの点で改良して開発した電子ブック形式の教材である。CD-ROMを媒体とし、次のような構成と機能を持つ。（資料1に教材の主な画面構成を示す。）

#### 1) 本文（読書素材）

読解素材は次の8点の図書を出典とし、それぞれ初めの20ページから40ページを教材にしている（注1）。

『タテ社会の人間関係』『タテ社会の力学』（中根千枝）、

『まなごしの人間関係』（井上忠司）、『稟議と根回し』（山田雄一）

『働くということ』（黒井千次）、『「ゆとり」とは何か』（飯田経夫）

『敬語を使いこなす』（野元菊雄）、『睡眠の不思議』（井上昌次郎）

#### 2) 辞書（単語解説）

8つの本文全体で3,800語に単語解説を作成した。英語と中国語の訳、漢字語彙の読み方、例文、反意語、同意語、関連語などを含む。

#### 3) 朗読音声

専門家が1分間300字から400字程度の速さで本文を朗読したものをもとに音声ファイルを作成した。学習者は読解過程で自由に本文の朗読を聴くことができる。なお、ミニディスクで音声のみを提供できる。

#### 4) 検索した単語の文書ファイル

学習者が読解過程で検索した単語は、あとから復習がしやすいように、単語辞書内容がフロッピーディスク上の文書ファイルに書き込まれ、ハードコピーとして印刷できる（図1）。

#### 5) 学習履歴

学習日時、学習時間、検索した単語、朗読音声の利用状況が学習履歴としてフロッピーディスクにテキストファイル形式で自動的に書き込まれる（図2）。このテキストファイルをもとに、学習時間などの分析を行うプログラム（学習ログ集計ソフト）を履歴の分析用に作成してある（注2）。

6) マニュアル (印刷媒体)

印刷教材として、マニュアルがある。マニュアルは、8点の図書の内容、文章の特徴が簡単に記してあり、また読み方のアドバイス、学習者にとって難度が高いと思われる文型の解説、中国語母語話者のために中国語とは同形異義の漢字語彙のリスト (孫2002) が掲載してある。さらに、教師のために各文章の言語的な特性—平均文長、漢字含有率などが載せてある。


<p>ないし (乃至) = or; between; from または [例] 田中氏ないし田中氏の友人が来るだろう。</p> <hr/> <p>身近 (みぢか) な = familiar; close to oneself [例] その子は彼女の一番身近な人だ。 [例] あの人には身近な問題をいつでも相談できる友人だ。 [例] 家族が自分にとっていちばん身近な人たちだ。</p> <hr/> <p>車内広告 (しゃないこうこく) = an advertisement in the train [例] 車内広告は結婚式場の広告が多い。</p> <hr/> <p>光景 (こうけい) = a spectacle; a sight; a scene (主に人が何かをしているようすについて使う。) [例] お祭りの日の光景は忘れられない。 [類] 風景 (ふうけい) : 主に自然について使う。</p>	
---	---

図1 検索した単語のファイル

<p>学習者名:SuzukiYoko ----- 開始時刻 12:07:09 ----- 英語版 00:00:04,Text,グランドメニュー 00:00:03,Text,トップページ 00:00:03,Text,まなごしの人間関係:メニュー 00:00:04,Text,まなごしの人間関係:目次 00:00:01,Text,まなごしの人間関係:メニュー 00:00:01,Text,まなごしの人間関係:著者情報 00:00:01,Text,まなごしの人間関係:メニュー 00:00:04,Text,まなごしの人間関係:本文1 00:00:02,Dic ,まなごしの人間関係:プロローグ 00:00:02,Dic ,まなごしの人間関係:概して (がいして) 00:01:43,Dic ,まなごしの人間関係:概して (がいして), 関連情報 00:01:52,Text,まなごしの人間関係:本文1(辞書付き単語), 再生あり 00:00:04,Dic ,まなごしの人間関係:平素 (へいそ) 00:00:02,Dic ,まなごしの人間関係:課題 (かだい) 00:00:02,Text,まなごしの人間関係:メニュー 00:00:02,Text,トップページ 00:00:34,Text,参照単語一覧 ----- 終了時刻 12:12:13 -----</p>
--

図2 学習履歴

## 4. 学習実験

### 4.1 学習実験の方法

- 1) 学習者と学習実験の期間：学習者は国立大学の留学生センターで日本語教育を終了した、大学院在学中の8名の中国人留学生である。学習実験にはボランティアでなくアルバイトとして参加を依頼した。また、学習者があまり学業に忙しくないと考えられる春休み中を学習実験期間として選んだ。
- 2) 学習課題：4週間の間に『新書ライブラリー』の中から、決められた2種類と自由に選んだ2種類、計4種類の文章を読むこと。朗読音声を聞くかどうかは学習者の自主性にまかせた。  
マニュアルを渡し、継続的に読むことや内容を考えながら読むことなどの「読み方のアドバイス」を与えた。また、終了後に読後感想を聞かせてほしいと伝えた。
- 3) 事前事後テスト：学習課題の前後に同じ内容のディクテーションテストを行った。ディクテーションテストの問題はすべて『新書ライブラリー』の8種類の本文からとった8文で、システムで使用する音声テープを編集して作成した(表1)。問題文は2回読み上げられるが、1回目は普通で普通に読み、2回目は書き取る時間をあたえるためにポーズを入れた。

表1 ディクテーションの問題文(抜粋)

- 
1. 産業界を例にとれば旋盤工というのは資格でありP会社の社員というのは場による設定である。(タテ社会の人間関係)
  2. これは一見あたりまえのこのようであるが、論理的にはこれは一つの個体認識のあり方であって、必ずしも普遍性を持ちうるとはいえない。(タテ社会の力学)
  3. にもかかわらず、なにか場違いな疎ましいものを突きつけられたような印象を受けたのは、おそらくその刑事が、学生であるほくと社会との最初の正式の対面であったからだろう。(働くということ)
- 

ディクテーションテスト8文のうち、1問目の文はテストに慣れるための練習として用いたため、データからはずした。残りの7文について文節ごとに、正しく書き取れたかどうかを点数化し、百分率に換算した。問題文ごとに事後テストの数値から事前テストの数値を引いた差を計算し、これを上昇率とした。学習履歴をもとに、学習者が朗読音声を聞きながら読んだ文を特定した。学習者ごとに、「ディクテーションテストスコアの上昇率A:音声付で読んだ文」「ディクテーションテストスコアの上昇率B:全く読んでいない文」の平均値を計算した。

なお、このディクテーションテストを日本語母語話者の大学生および大学院生に行った

ところ、ほぼ完璧に聞き取ることができ、正答率は100%であった。

## 4.2 学習実験の結果

ディクテーションテストの結果について、「上昇率A:音声付で読んだ文」「上昇率B:全く読んでいない文」の平均、標準偏差を表2に示す。上昇率Aと上昇率Bの間に差があるかどうかを分散分析によって検定したところ、統計的に有意な差が認められた( $F(1,7)=7.35, p<.05$ )。すなわち音声付で文章を読んだ場合のディクテーションテストの上昇率は、テストの練習効果以上の上昇であったと言える。

表2 ディクテーションテストの上昇率 (n=8)

	上昇率A: 音声付で読んだ文	上昇率B: 全く読んでいない文
平均	0. 1 1 2	0. 0 5 5
標準偏差	0. 0 2 2	0. 0 5 9

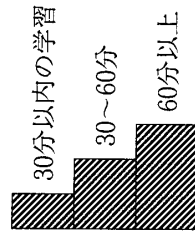
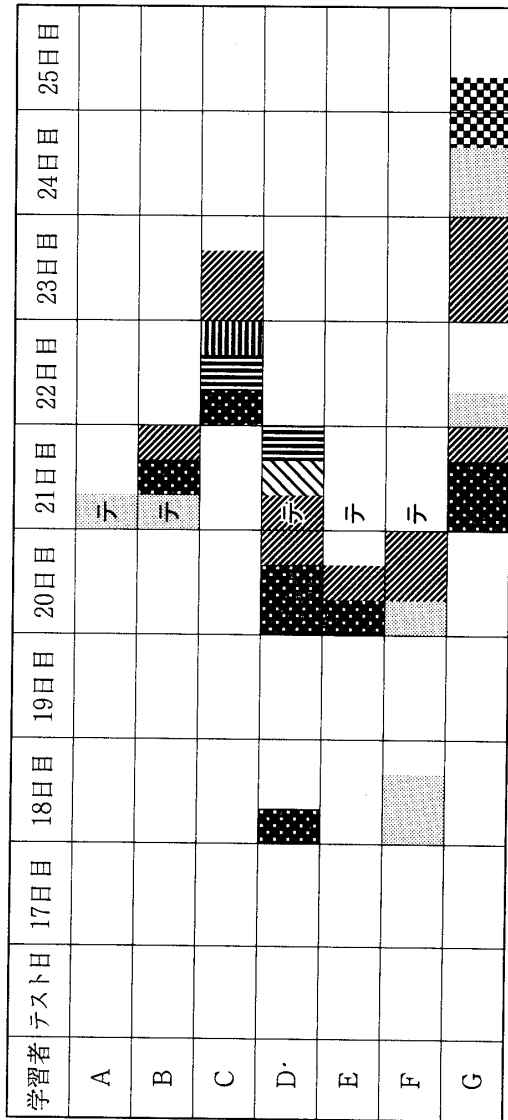
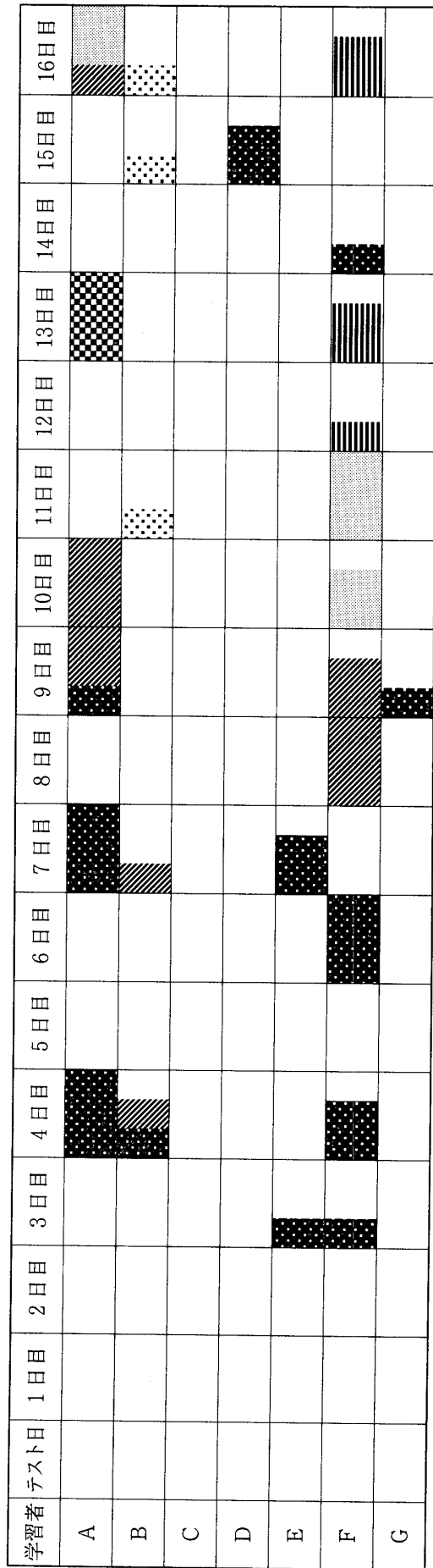
## 4.3 学習履歴の分析—学習時間—

学習履歴をもとにした学習時間調査の結果は図3のようになった(ただし、1名分のデータは破損のため図に表していない)。7名中、学生Aおよび学生Fの2名は継続的な学習を行っていると思わせるが、ほかの学習者は事後テスト直前のまとめ読み、いわゆる「一夜漬け」をしていることがわかる。また、実は学習実験には初め、もう1名の参加者(9人目の参加者)がいたが、事後テストまでに課題を終えることができず、事後テスト後に学習を継続した。

## 4.4 インタビュー調査

テスト直後にインタビュー調査を行った。まず、このシステムを使って勉強することに対する評価を知るために「勉強してよかったこと、勉強になったこと、続きを読みたい本、困ったこと」の4点を質問した。その結果、このシステムで勉強してよかったことは「単語を覚えた(3名)、聞く練習になった(3)、速く読めるようになった(1)、内容が勉強になった(1)、発音の勉強になった(1)」という点である。このシステムそのものの良さは「便利さ」に集約できる。「朗読を聴けるので覚えやすい、発音が難しいが繰り返して聞ける、単語の読み方をすぐに確認できる、単語をすぐに調べられる(2)」といった点が指摘されている。また、「ゲーム感覚、パソコンに慣れているので使いやすい」というコンピュータに対する親しみやすさをあげた学生が2名いた。

勉強になったことは、「敬語を学んだ(3)、長い文を聞いた、単語を覚えた(2)、聴解の練習になった」であり、単語と聴解については上記の「勉強してよかったこと」に重なる。



テ = 事後テスト当日

セルの柄の違いは図書の種類を示す。

図3 学習時間調査 (2001年3月)

続きをよんでみたい本は「敬語(3名)、睡眠の不思議(3名)、まなごしの人間関係(3名)、稟議と根回し(1)、タテ社会の人間関係(1)」である。

困ったことは、技術的な面として「画面が見にくい(2名)」、教材の質として「単語の説明が不十分(1)」、文章の内容として「文章とくに接続詞が難しい(1名)」であるが、「なし」と回答した学生は3名であった。

以上の結果をまとめると、学生が「学び」として意識していたことは「単語」「聴解」など言語的な側面について顕著であり、「読書の内容」についての学びの意識は「敬語が勉強になった」と答えた3名以外、希薄である。しかし、続きを読みたいという反応があることから、読書によって知的な刺激を受けていることも事実である。コンピュータ画面上の文章を読むことの困難さは2名の学生が指摘した。今後技術の進歩とインターネットなどの普及によって、この問題は改善されていくと思われる。

次に、学生の日常的な状況や特性について知るために「日本語力をつけるためにしていること、日本語の勉強で困ること」をたずねた。その結果、日本語力をつけるためには「日本人の友達と話す」が5名が多かった。ほかには専門の授業を通して学ぶ例が「専門の論文を読む、レポートのチェックをしてもらう」(各1名)、マスメディアを通して学ぶ例が「新聞、ニュース、テレビドラマやいろいろな番組、ドラマや映画をみたら単語を調べる」(各1名)、過去の日本語の授業の復習をする例が「文法の本を読む、テープを聴く、教科書を復習する」(各1名)であった。日本語の勉強で困ることは聴解力に関するものが3名、発話に関するもの(発音、話し方、表現力)が3名、敬語3名、「助詞・助動詞の使い方、和語、擬音語擬態語」(各1名)、話し言葉と書き言葉の区別が2名であった。

読み速度に関する質問として、システムの中の朗読音声の速さと自分の黙読の速さを比べると、テープのほうが速いと感じていた学生は7名中2名であった。

## 5. 考察と今後の課題

今回の学習実験では、まず、朗読音声付で読書をした場合ディクテーションテストの得点が練習効果以上に向上することがわかった。これは、文が読み上げられたときにその文を「聞いて意味処理をする能力」が、朗読音声付の読書によって向上するということであり、聞き取り能力の向上につながるものと推測できる。今後の課題は、この推測を確認すること、すなわち、「講義を聴く、討論に参加する」などの実際の日本語運用と学習成果の関係を調べることである。つまり、ディクテーションの力がついたことが、実際の日本語運用に反映されるかどうかを検証する必要がある。

次に、学習過程の記録(学習履歴)の分析から、継続的な学習をしている学生は少なく、テスト直前のまとめ読みが多いことがわかった。インタビューによれば、学習者はさらに日本語力が必要であることを認識して日常的になんらかの努力をしており、その点から考



える限り日本語学習動機は強いはずである。それにもかかわらず、非継続的で非効率的な学習方法になるのはなぜであろうか。この点について考察したい。

まず、第一に考えられることは、仮に便利な「読み道具」があっても独習による「読書」は困難なものだ、ということである。インタビューの結果にもあるように、学生にとって日常的な日本語の勉強の中に、「読書」は含まれておらず、そもそも「読書の習慣」が希薄だったことも、関係があると思われる。

第二に考えられることは、事後テストに行われる単語テストとディクテーションテストによって学習が方向付けられ、継続的な読書や内容を楽しむなどの意識が薄くなり、そのためまとめ読みや一夜漬けに近い学習行動になったのではないか、ということである。この両テストを意識するならば一夜漬けは合理的な勉強方法とも言えるからである。

私達は、「上級日本語終了者」の日本語力はまだ実践に通用するには不十分であり、かれらは語彙力も読解力もさらに伸ばしたいだろう、伸ばすためには数多く読みたいだろう、読むための便利な「読み道具」があったら使おう、と想定した。しかし学習実験の結果はこの想定を支持していない。読書が日常的な習慣ではなく、主体的に動機付けられていない学習者が多くおり、「読み道具」が与えられても「だから読む」わけではないのである。

それでは、この状況を私達はどのように捉えるべきだろうか。もしも、留学生在が日本の大学で教育を受ける意味の中に、より広く視野を広げ、より深く社会を見つめ、そして思索すること、そしてより良い人生を求めることといった価値が含まれているとするならば、留学生在が「読書」から遠ざかっている状況に対し懐疑的にならざるをえない。マスメディアから情報を得、友人達と会話をする 것도当然重要である。しかし、「読んで世界を広げたい」と思いながら、「読めない」ために「読む習慣を失った」学生はこのまま放置しておくべきではないと考える。

では、どのような対処が考えられるだろうか。読書は本来、自律的な「学び」である。読書による知的刺激、読んで学んだ、おもしろかったという満足が読書を動機付けるものと思われる。今回の学習実験で、唯一、継続的な「読書」を行った学習者F(図3)のみが、「本の内容が勉強になった」とインタビューに答えている。これは偶然ではなく意味があると思われる。そこで、二つの重要なことが考えられる。1点目は、日本語教育の課程の中で自律的な読書の習慣を身につけるよう、学習カリキュラムを工夫すること、2点目は、終了後も自律的な読書の習慣を続けられるように、支援の策を講じることである。

1点目のカリキュラムの工夫は、「読書習慣をつける」という態度に関する問題であり、直接その成果をテストで測ることができないため、おそらく、多くの教師が「重要だ」と考えていても積極的に授業内容に取り入れにくいのではないだろうか。しかし、「身につけるべき重要なこと」というのはテストで測りやすいものばかりとは限らない。この問題

は、今後理論的にも具体的な方法の面でも、考えていくべき課題であると思われる。

2点目の日本語教育課程終了後の自律的読書の支援は、キャンパスにおけるノンフォーマルな学習という観点から重要な問題を含んでいる。キャンパスにはいろいろな日本語レベルの、いろいろな立場の非日本語母語話者が存在し、その人々はいろいろなレベルで日本語学習を必要としている。日本語教育課程終了後の留学生もその中に含まれるととらえ、「ノンフォーマルな語学学習の支援」という枠組みで具体的な方法を考えてもよいのではないだろうか。大学のIT化に伴って大学教職員のコンピュータリテラシーが問題とされたときに、大学が組織的に講習会などを設けて、教職員のコンピュータリテラシー向上を図ることは、よくあることである。同じように、非日本語母語話者の大学教職員および学生に対して、授業カリキュラム外に語学学習支援を行っていくことは、決して無理は発想ではないと思われる。そのための現実的で具体的な方法を考えることが、今後の課題である。

本稿は第3回日本語教育とコンピュータ国際会議（2002年7月11日－14日 カリフォルニア大学サンディエゴ校）で行った口頭発表「読解過程における朗読音声の提示—マルチメディア教材の学習効果に関する一試行—」（鈴木庸子・来嶋洋美・清水百合、予稿集 pp209-212に収録）に加筆したものである。また本研究は1999 - 2002年度科学研究費助成金基盤研究B（2）「外国語学習における独習型読書支援システムの開発に関する基礎的研究」（研究代表者 鈴木庸子）の一部である。

## 注

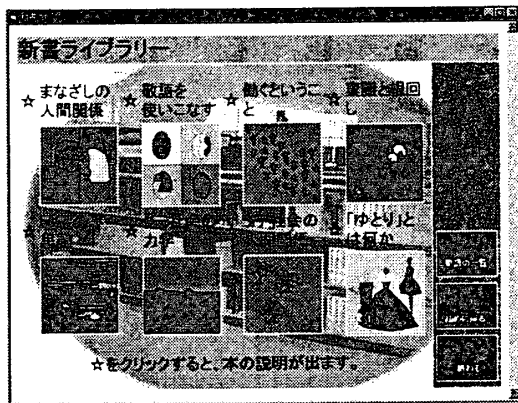
- 1 新書ライブラリーの読解素材は、日本語教育支援システム研究会が作成したデータベースCAS TEL/Jに所収の文章を使用している。
- 2 「学習ログ集計ソフト」はテキストファイル形式で自動的に作成される学習履歴を読み込み、学習時間の集計、検索した単語リスト一覧、朗読音声提示機能の利用状況、辞書の中の例文、関連語など、詳細な説明の利用状況をエクセルファイル上に一覧表示する。（資料2）

## 参 考 文 献

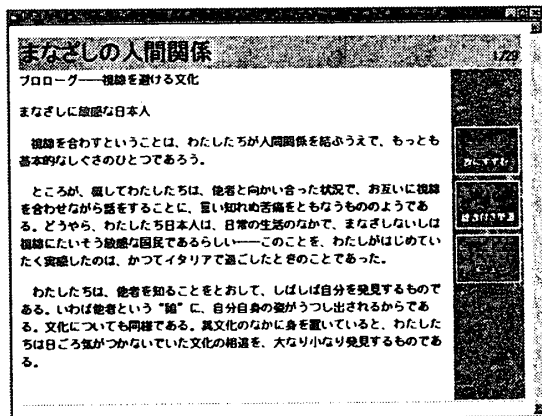
- 来嶋洋美・鈴木庸子（2000）「独習型読書支援システム『新書ライブラリー』の利用と評価」『教育メディア研究』Vol.6 No.2 1-12
- 鈴木庸子（2002a）「『新書ライブラリー』を利用した読書——私立大学の短期留学生および大学院生の場合——」『日中国際シンポジウム 中国人学習者を対象とした日本語教育 論文集』九州大学留学生センター 58-66

- 鈴木庸子 (2002b) コンピュータを利用した自律学習支援のしくみを求めて—「食糧問題を考える」から「新書ライブラリー」まで—『教育とメディア』『教育とメディア』論集刊行会  
276-284
- Suzuki Y., Y. Shimizu, H. C. Quackenbush (2002) "Audio Tapes for the *Shinsho Library*: Self-Study Reading Materials Using Computers" in *Learning Japanese in the Network Society*, Kazuko Nakajima, University of Calgary Press,  
123-144
- 鈴木庸子・来嶋洋美・清水百合 (2002) 「読解過程における朗読音声の提示—マルチメディア教材の学習効果に関する一試行—」第3回日本語教育とコンピュータ国際会議 July 11-14, 2002. 於カリフォルニア大学サンディエゴ校 (予稿集 pp.209-212)
- 孫建軍 (2002) 「読書支援システム「新書ライブラリー」における日中同形異義語について」『日中国際シンポジウム 中国人学習者を対象とした日本語教育 論文集』九州大学留学生センター  
67-75
- 田地 (鈴木) 庸子・横田淳子・石本菅生・岩佐玲子・来嶋洋美 (1987) 「日本語教育 (上級レベル) のためのCAIシステムの開発」『教育研究 29』(国際基督教大学学報I-A) 169-192

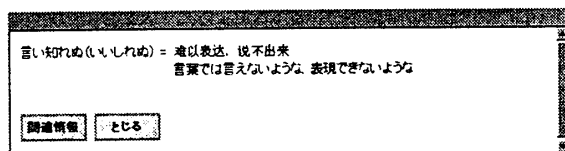
資料1 『新書ライブラリー』（中国語版）



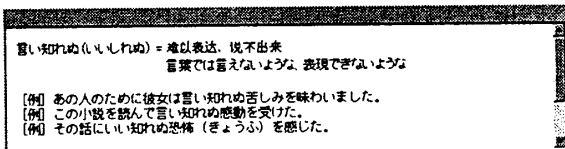
メニュー



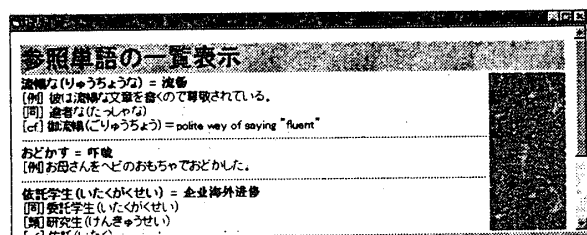
本文



**関連情報** をクリックするとこのことばに関する詳しい情報が現れます。



単語の解説



調べた単語のリスト

資料2 学習 LOG 集計結果表示画面 (LOG)

学習者:\*\*\*\*\*

学習日:01.04.03

2014

全 学 習

学習内容	単語	時間(秒)	付加情報
敬語を使いこなす			
メニュー		45	
本文1(辞書付き単語)		703	再生あり
本文1	あるいは~かもしれません	53	関連情報
本文1	まちがいやすい	37	関連情報
本文2(辞書付き単語)		2016	再生あり
本文2	スタートをする	11	
本文2	ともすると	25	
本文2	営業部長(えいぎょうぶちょう)	502	関連情報
本文2	敬語(けいご)	1288	関連情報
本文2	要するに(ようするに)	42	
本文3(辞書付き単語)		787	再生あり
本文3	正解(せいかい)	271	関連情報
本文4(辞書付き単語)		1184	再生あり
本文4	あいにく	769	関連情報

タイトル:敬語を使いこなす

学習内容	単語	時間(秒)	付加情報
メニュー		45	
本文1(辞書付き単語)		703	再生あり
本文1	あるいは~かもしれません	53	関連情報
本文1	まちがいやすい	37	関連情報
本文2(辞書付き単語)		2016	再生あり
本文2	スタートをする	11	
本文2	ともすると	25	
本文2	営業部長(えいぎょうぶちょう)	502	関連情報
本文2	敬語(けいご)	1288	関連情報
本文2	要するに(ようするに)	42	
本文3(辞書付き単語)		787	再生あり
本文3	正解(せいかい)	271	関連情報
本文4(辞書付き単語)		1184	再生あり
本文4	あいにく	769	関連情報
本文5(辞書付き単語)		286	再生あり